



基調講演

日本におけるボーヴォワール 『第二の性』の反響をたどる

ジュリア・C・ブロック

エモリー大学

.....
エモリー大学准教授(日本学)、ロシア・東アジア言語文化学部長。代表的著作に、文学作品のフェミニスト表象に関する『The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973』(ハワイ大学出版、2010年)、戦後の男女共学化批判を分析する『Coeds Ruining the Nation: Women, Education, and Social Change in Postwar Japanese Media』(ミシガン大学出版、2019年)、領域横断的な日本のフェミニズムについての共編著『Rethinking Japanese Feminisms』(ハワイ大学出版、2017年、Ayako KanoとJames Welkerとの共編)がある。

【要旨】シモーヌ・ド・ボーヴォワールの不朽のフェミニスト哲学書『第二の性』が日本語に翻訳されたのは、フランスでの初版出版のわずか4年後である。この翻訳書刊行のタイミングは、日本が、連合軍による占領という影から抜け出そうとしながら、敗戦直後の改革の影響と格闘する時期に重なった。戦後の改革は、日本の女性たちに、これまで享受したことのないさまざまな権利と機会を提供した。しかしそうした権利を行使しようとする、女性たちの志が、妻そして母親としての「キャリア」に向くことを期待する保守的な規範と衝突することになった。慣例に従わない生き方を求めた女性たちの中には、ボーヴォワールが示した、経済的自立と職業的な投企による「自由」というビジョンを——実現が難しくとも、あるいは難しかったがゆえに——戦前の「良妻賢母」的な女らしさモデルに代わる魅力的な選択肢だと受け止めた者がいた。本報告では、1950～60年代の日本の女性たちが、ボーヴォワールの理論の価値を自分たちの生き方や仕事に照らしてどのように理解したか、オマージュやパロディを含む、さまざまな反響と批評について探る。

イントロダクション

今日は、フランスのフェミニスト哲学者、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの著作の、日本における翻訳と受容についてお話しします。ボーヴォワールをご存知の方もおいでと思いますが、最初に彼女の思想について簡単にご紹介させていただきます。

話は1966年の9月18日に遡ります。60人以上の報道写真家が、台風による悪天候のなか、二人のフランス人「セレブ」、哲学者のシモーヌ・ド・ボーヴォワールとジャン＝ポール・サルトルの到着という歴史的瞬間をとらえようと、羽田空港に集まりました。二人は、ビートルズのようなロックスターの来日時に匹敵する群衆に出迎えられました。

ボーヴォワールは、彼女の名前を呼びながら、握手をしようと手を伸ばしたり、腕に触れようとしたり、大スターの哲学者と彼女の名高いパートナーをとにかく一目見ようと集まった、若い女性の群れにもみくちゃにされます¹。サルトルのパートナーというだけの紹介をされることも少なくないボーヴォワールは、彼女自

¹ 朝吹登水子『サルトル、ボーヴォワールとの28日間：日本』(同朋舎出版、1995年)27-31頁。

身の日本での人気がこれほどであるとも、また、この来日時期が、「ウーマンリブ」として知られることになる「第二派」フェミニズムの爆発的興隆前夜であるとも、気づいてはいなかったでしょう。

ボーヴォワールの名前は既に世界中で知られていましたが、日本での人気については、少し説明を加える必要があります。1960年代の日本社会は、いくぶん保守化していました。女性たちは、両親や教師たちから、そしてもちろん日本政府からも、ある種の「良妻賢母」になるようにとの教えを受けていました。「良妻賢母」は20世紀初期の日本における女性らしさのモデルで、夫や父に従い、家族に尽くし、家庭という領域に留まることが強調されていました。ボーヴォワールも彼女の哲学も、この価値観とは対極にあります。ボーヴォワールは、結婚も母になることも拒み、女性たちには、男性から経済的に自立することを推奨していました。思えば、彼女の来日が許されたことすら不思議です。

しかし、このような明らかな世相との違いがあったにもかかわらず、ボーヴォワールは当時の女性から驚異的な人気を集めていました。この理由についてはまた後でお話することにして、先に、ボーヴォワール自身について簡単に紹介し、1966年にボーヴォワールを迎えた日本の歴史的背景を解説します。続いて、日本の女性たちはボーヴォワールの考えの何が役に立ち、何が役に立たないと思ったかを説明し、ボーヴォワールの書籍の翻訳について検討します。結びとして、ボーヴォワールの哲学が日本の女性たちと日本のフェミニズム運動にとって不朽の遺産であることについて、私の考えを述べさせていただきます。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールとは誰か？

ボーヴォワールは、1908年、パリに住むカトリックのフランス人家庭に生まれました。父親は法律事務所で働いていました。母親は、当時のフランスの中流階級のカトリック信者の女性たちがそうであったように、主婦でした。母親は敬虔な信者であり、シモーヌも妹のヘレンも母親のようになることが期待されていました。中流家庭の主婦として、家にいて、子どもを産んで育て、その子どもの父親である夫は外で働き家族を支えるというように。しかし、第一次世界大戦の時代に一家は財産を失い、当時の習慣であった花嫁の持参金の用意ができなくなったことからそれをあきらめ、娘たちを働きに出さざるを得なくなりました。つまり、信じられないような話ですが、歴史的に偉大なフェミニスト哲学者が教育を受けることができたのは、花嫁の持参金という家父長的制度があったゆえ、なのです。

ボーヴォワールは、当初は女子修道会で教育を受けていましたが、フランスの名門大学であるソルボンヌに進学しました。ソルボンヌでは、哲学を学び、教師になるために勉強しました。彼女は、男子学生と一緒に大学で学んだ女子学生の第一世代です。それ以前は、彼女のような女性たちは、独学で学ぶか、家庭教師から教えを受けていました。

フランスのフェミニズムを研究するトリル・モイはこう書いています。

ボーヴォワールは1920年代から1930年代にかけて成人した知識人女性の世代に属している。…彼女たちが受けた教育と彼女たちの知識人としての経歴との関わりのなかで、少なくともこうした女性たちは、男女平等を原則とする社会で、男性たちと同等に扱われていると信じていた。総じて、彼女たちは、みずからの女性性の社会的意味には、どちらかといえば無頓着であった。…けれども彼女たちも中年に達する頃になると、経験の重圧から、その多くが、男性中心社会において女性であることの意味について考えずにはいられなくなる。もし私たちがボーヴォワールの回想録を信ずるとすれば、彼女は1946年になってようやく、教育のある女性でいることは、教育のある男性でいることと、まったく同じではないと気づくのである。この洞察の帰結を、彼女は稀有の道徳的・政治的一貫

性をもって追求する。そして自分が知識人女性であると認識したまさにその瞬間、書き始めたのである。そう『第二の性』を²。

ボーヴォワールの著書の中で最も良く知られているのは、長編の哲学書である『第二の性』でしょう。歴史、文学、神話、生物学、哲学、人類学を含め、様々な分野からの豊富な論拠に基づき、人間社会は、古代から女性を男性の「他者」扱いしていると論証しています。つまり、女性たちは、歴史的に、男性を基準に特徴づけられ、その基準を満たさない点は欠如とみなされました。これにより、女性は男性より劣ると定型化され、社会制度的に虐げられてきました。例えば、結婚は、女性から自己決定という自然権を奪い、生殖の道具として使うしくみであるというように。

ボーヴォワールの有名な言葉「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」は、この本の一節です。ボーヴォワールが言わんとしているのは、女性は生まれたときから女らしさのステレオタイプに従うように教えられ、それに従わないときは非難され罰を受けるということです。つまり、「女らしさ」とは先天的な性質ではなく、生涯を通じた訓練によって獲得されるものなのです。女性たちが自由を手にするためには、このステレオタイプは虚偽であり、自然ではなく作られたものだとして理解して、これから解放されなければならない。つまり、ボーヴォワールの議論は、現代における生物学的性別と、社会的に構築されたジェンダー規範の区別の基礎を作ったのです。

ボーヴォワールはまた、女性が本当に自由になるには、結婚などの制度によって生計を男性に依存するのではなく、経済的自立をしなくてはならないと述べています。ボーヴォワール自身は、結婚をしたことはありません。男性と女性の両方と性的関係をもったことが知られていますが、同性愛の側面については1960年代には公にはされていませんでした。さらに重要な点は、ボーヴォワールは、作家や教師としてのキャリアを持ち、その後、現在それと認知されている、フェミニスト活動家、理論家となりました。

日本の女性にはボーヴォワールに何を見出したのか？

日本の女性たちは、ボーヴォワールに何を見出したのでしょうか？ この問いに答えるために、少し時間をさかのぼります。1945年、第二次世界大戦が終わり、日本は連合軍の占領下に入りました。アメリカ合衆国主導の占領体制は、文字通り、日本社会の法的枠組みを書き換えました。1946年の新憲法の制定と、それに基づく民法の改正により、日本の女性たちは、これまでにない様々な法的権利を手に入れました。選挙権や被選挙権、配偶者を選ぶ権利、男性と同じ教育を受ける権利などです。

とはいえ、女性たちがそうした権利を行使しようとすると、女性たちの「居場所」はここだと決めつける、あくまでも保守的な社会文化的規範と衝突することになりました。つまり、戦後の女性たちはまだ、女性は家父長に服従すべきという、戦前の家制度の古い考え方と闘わなければならなかったのです。家制度は戦後の占領期の憲法改正により法的強制力を失っていましたが、ジェンダー役割についての文化的な習慣や態度という形で継承されていました³。

このような姿勢は、戦後の経済状態の変化に伴い強化されていきました。戦争による荒廃から復興し、

² トリル・モイ著・大橋洋一ほか訳『ボーヴォワール：女性知識人の誕生』（平凡社、2003年）、13～14頁。

³ 戦後の女性の社会的地位に関する様々な法改正についての簡潔な説明と、根強く残る男女「平等」の法と事実の食い違いについては、Kiyoko Kinjo, “Legal Challenges to the Status Quo,” in Kumiko Fujimura-Fanselow and Atsuko Kameda, *Japanese Women: New Feminist Perspectives on the Past, Present, and Future* (New York: The Feminist Press, 1995), 353-363 頁参照。

1960年代には加速的な経済成長が進みましたが、その経済的繁栄は、性別に基づく労働分担にますます依存するようになりました。社会全体で女性を家庭の領域に縛り付けておけば、男性は経済成長の動力となることに専念できるという訳です。1950年代から60年代の日本の女性たちは、戦後の改革で約束されたはずの平等な権利と、現実社会の不平等をどう整合させるか格闘していました。その格闘のクライマックスが、1970年代の女性解放運動です⁴。

この闘いは、戦後導入された共学制の教育で育った第一世代の若い女性たちにとって、特に重要でした。1945年以前の制度では、小学校の1～2年生より上の教育は男女別学でした。男子は大学から就職へと進む教育を受けることができましたが、女子は「良妻賢母」になる「キャリア」のために女子校へ行ったのです。戦後の改革のおかげで、1940年代後半以降の学校教育を受けている女子生徒は、男子生徒と肩を並べて名門大学を目指すことができるようになりました。お気づきのように、ボーヴォワールも娘時代に同じような状況を経験しています。戦後保障された男女平等を存分に活用しようと格闘していた日本の女子学生たちは、ボーヴォワールの、女性解放と経済的自立の必要性の議論だけでなく、教育の平等を真っ先に体験した女性である点にも、結びつきを見出していたのです。

『第二の性』がフランスで発表されたのは1949年でした。そのわずか4年後に日本語翻訳が出版されています。このタイミングが、日本の読者、特に女性たちから熱狂的に受け入れられた要因でした。1953年は、連合軍による占領が終結した翌年です。日本は自治を取り戻しました。その2年後の1955年、保守政党の連合により自由民主党が誕生しました。保守系の政治家は、直ちに、占領期の改革を逆戻りさせようと動き始めます。その政策には、伝統的な女らしさの規範とされた女性の役割、「良妻賢母」の奨励が含まれていました。ボーヴォワールの女性解放の議論に刺激され、女性たちは、このような保守回帰に抵抗しました。

1961年には、ボーヴォワールの回想録の第1巻の日本語翻訳『娘時代』が出版されました。誕生から20代前半までの物語です。「男の知性を持つ」（と父親からもよく言われた）彼女にとって、社会から女の子らしくふるまうことを求められるのは辛かった、ということなどを詳しく語っています。若き日の友人関係や恋愛、終生の伴侶となったジャン＝ポール・サルトルとの運命的な出会い（終始恋愛関係であった訳ではありませんが）。哲学の勉強、神への信仰を失い無神論者になったこと、作家そして学者としての人生の目的の模索。宗教に関する話はさておき、古臭い「良妻賢母」思想とは関連のない人生を歩みたいと思いながらも、その志が歓迎されない社会で成人を迎えようとしている女性たちにとって、ボーヴォワールの物語は、深く共感できるものでした。ボーヴォワールの回想録、とりわけこの第1巻は、名高い『第二の性』以上の影響力があったと考えられます。この本で語られた課題は、日本の若い女性たちが大人になる道のりにおいても重要なものであったからです。

よく知られているボーヴォワールの人物像のうち、フェミニストの象徴としての人気獲得に大きく貢献したのは、サルトルとの関係のあり方でした。日本のメディアは、二人の関係を、完全な平等と自由、互いへの尊敬に基づく理想的な結合であると描写しました。当時の若い女性たちが特にあこがれた二人の関係を、上村くには「サルトル＝ボーヴォワールというカップル神話」と呼んで、以下のように要約しています。

⁴ 戦後の高度経済成長期の女らしさモデルを構築した歴史的、社会的、文化的動向の詳細については、Chapter 1 of Julia C. Bullock, *The Other Women's Lib: Gender and Body in Japanese Women's Fiction, 1960-1973* (Honolulu, HI: University of Hawai'i Press, 2010)参照。

サルトルとボーヴォワールの関係といえば、60年代の私たちには憧れの的であった。風説によると、この高名な二人の恋人は、同じホテルに住みながら別々の部屋に住み、カフェで仕事をし、レストランで食事をしながら、これから出版する原稿をサルトルと批評しあうという。ボーヴォワールは家事労働からいっさい解放されて、知的な仕事と恋愛を両立させているらしい。それは60年前半に娘時代をすごしていたすべての日本女性にとって理想の関係のように見えたのである⁵。

サルトルとボーヴォワールは、明らかに、そのような見方が助長されることに協力的でした。1966年の『朝日新聞』によるインタビューでは、いつも一緒に「私たち」というロマンチックな雰囲気を見せて、互いの話のすべてに同意しながら、机を並べて仕事をしたり、家事や雑用を分担していると語っています⁶。この、ふたりの「ユニオン」を結婚になぞらえた空想的な説明は、ほかで聞かれる、実際にはふたり一緒に暮らしたことはないとか、サルトルがボーヴォワールを訪ねるときにはいつもボーヴォワールが料理をするとか、もう互いを相手にしてのセックスはしなくなっている（ふたりはそれぞれに複数の人たちと関係を持っていました）、といった話とはだいぶ異なっています⁷。ボーヴォワールは回想録で、自身の異性関係について（サルトルの異性関係についても）率直に語っているため、ボーヴォワールとサルトルの関係がオープンであることは良く知られていて、それもまた、日本の女性たちを魅了していた点のひとつでした。両親、教師、1960年代のマスメディアから、ロマンチックラブを追い求めることは奨励されつつも、その向かう先にあるのは結婚と母親になることだと諭され、日本の女性たちは、制約の多い結婚の慣習の外で堂々と愛とセックスを追求するという考えを、解放と受け止めました⁸。

ボーヴォワールに影響されて制作された当時の文芸作品の例として、倉橋由美子の作品に目を向けてみましょう。倉橋は特に、ボーヴォワールによる結婚と母性の否定と、女性たちの経済的な自立についての議論に触発されました。多くの小説やエッセイ、短編小説にそれがはっきりと表れています。

初期のエッセイ「私の第三の性」は、明らかに、女性の「他者性」と自立の必要性についてのボーヴォワールの議論をもとにしています。倉橋は、ボーヴォワールの議論を活用して、女性の芸術的表現による女性解放を目指し、自らの表現形式を創り上げました。議論を巻き起こした初著『暗い旅』は、サルトルとボーヴォワールのオープンな関係へのオマージュ（またはパロディ）であると言えます。この物語では、主人公と彼女の恋人は、とがめられることなく不特定多数の相手と性的関係を結びます。条件は、そのすべてについて互いに打ち明けること。サルトルとボーヴォワールが互いに宛てた手紙でそうしたように。

加えて、倉橋の短編作品の多くは、結婚を性的関係も愛もない不合理な制度であると皮肉っています。女性主人公たちは、夫たちの性的な誘いには「なんのため？」と食ってかかったり、性的サービスは契約のうちではないと釘をさしたりします。実際、初期作品のほとんどでは、結婚は、妻は夫に「飼われる」けれども主婦としての典型的な「義務」からは免除されるという契約により成立しています。ある作品の主人公は、彼女が交わした契約では、料理も、掃除も、寝食をともにすることも、夫の子を産むことも義務付けられてはおらず、単に夫に「仕える」ことだけが求められているに過ぎないと主張します。作品中では、「仕える」に何が含まれているかは具体的には明らかにされていませんが、「大した仕事」であることは断言され

⁵ 上村くにこ「ボーヴォワールの恋愛人生：『行儀の悪い娘』から『理想の妻』へ」、『女性学研究』14号、2007年3月、27頁

⁶ 朝日新聞によるインタビューは、朝吹『サルトル、ボーヴォワールとの28日間』の88-92頁に再録されている。

⁷ 例として Hazel Rowley, *Tete-a-tete: Simone de Beauvoir and Jean-Paul Sartre* (NY: HarperCollins Publishers, 2005) 参照。

⁸ ロマンチックラブ・イデオロギーと「純潔教育」（婚前禁欲の奨励）については Sonia Ryang, *Love in Modern Japan: Its Estrangement from Self, Sex, and Society* (London/NY: Routledge, 2006) 参照。

ています⁹。

面白いパロディの場面もある一方で、ほとんどの物語は陰鬱な皮肉で結ばれます。例えば、『結婚』（1965 年）では、慣習的な結婚生活の苦役から主人公の L を守るはずの契約は、1960 年代の中流家庭で一般的になった性別による役割分業に則して書き換えられてしまいます。L は妊娠し、家庭に縛られ、凝った料理を作ることに専念していますが、外で働く夫はほとんど家におらず、その料理を口にすることはありません。結婚制度を内から破壊することで始められた物語は、「普通の状態」に戻るといふ筋書き上、最も不幸な結末で終わります。この新しい役割配置に伴うむなしさと退屈さにより、L は精神的に追い詰められます。L には内なる男性人格 K があり、それを家庭内での役割を果たすために抑え込んでいましたが、ついには K に自分を殺してくれと懇願するに至ります。L の物語のように、従来型の結婚構造を転覆させることに失敗して物語が終わるパターンは、倉橋の初期の作品に共通する、ふたつの基本的なテーマを浮き彫りにします。相当数の日本人女性による、極めて平凡な生活のなかのささやかな反抗と、中流階級的結婚イデオロギーによる圧力への抵抗の難しさという嘆きです。

朝吹登水子も、ボーヴォワールとの出会いにより私生活と職業生活が劇的に変化した作家のひとりです。

朝吹は 1917 年東京生まれ¹⁰。三井財閥に連なる裕福な家庭の 5 人兄妹の末っ子でひとり娘でした。父・常吉は、スタイリッシュで社交的で、世界を股にかけて活躍する人物でした。若い頃にイギリスで教育を受け、ヨーロッパ風の洗練された生活様式の家庭を築いていました。子どもたちが英語に堪能になるよう、幼いころから英国人女性家庭教師をつけていました。ですから、朝吹が（兄たちと共に）成人後の相当の年月を、海外で勉強したり旅行をしたりして過ごしたのも当然です。15 歳の時に体を壊して女子学習院を中退した後、ごく短期間、同じ社会階層の若者と結婚していました。18 歳で離婚し、パリ郊外の女学校に入学します。フランス語を習得してからソルボンヌ大学に進学し、1939 年にヨーロッパ大陸での戦争勃発を見越して兄と共に日本に呼び戻されるまで、そこで学びました。

朝吹がフランスにもどって、服飾の学校に入学したのは 1950 年のことでした。その間、東京は、戦争による荒廃と戦後の食料・物資の不足に見舞われ、朝吹家の資産も打撃を受けました。朝吹は、生活のために、様々な仕事を引き受けました。ファッションレポーター、翻訳、通訳、コンサルタント。そして、日本企業や政府機関の求めに応じ、パリにおける有能な「仲介人」の役も果たしました。その例として、日本政府の代理を務めて、カンヌ映画祭で日本の映画をプロモーションする姿が写真に残されています。日本とフランスの連絡役を務めるなかで築いた華やかな人的ネットワークをつてに、パリの高級ファッション、美術、文学の世界に足を踏み入れました。このような道のりを経て、ボーヴォワールとサルトルを中心とする知識人「ファミリー」と直接の交流をするようになり、すぐにこのカップルと親しくなって、ついには、1966 年の来日の際の通訳とツアーガイドを務めることになったのです。

朝吹は、ボーヴォワールの回想録の翻訳もしています。その第 1 巻は 1961 年に刊行され、日本の若い女性たちに大きな影響を与えました。朝吹も、ボーヴォワール同様、娘たちを家に留め置き外界からの悪影響から守ろうとする上流階級の家に生まれました。そしてまた、ボーヴォワール同様、数ある進歩的理念のなかでも特に、女性解放を支持する作家そして著名人としての自立したアイデンティティを確立することで、自らが所属する階級社会の慣習に逆らう道を進みました。10 年弱の年の差があれども、ふたりは同じ様に、第二次世界大戦という環境下の社会的・政治的混乱を生き抜き、家の財産が失われた後は、自ら

⁹ 倉橋由美子「共棲」、『倉橋由美子全作品集 6』（新潮社、1976 年）、93 頁

¹⁰ 朝吹の生い立ちについては、自伝『私の東京物語：蘇る日々 わが家のアルバムから』（文化出版局、1998 年）

の手で人生を切り開くことを余儀なくされたのでした¹¹。経済的自立と思考的独立が、所属する社会における「常識」に対する疑問を抱かせ、他の女性たちと、それも異なる階級、国籍、人種の女性たちと、共有できる目標を見出させました。ですから、朝吹がボーヴォワールの回想録を日本語に翻訳したいと切実に思ったのも納得できます。また、二人が出会ってすぐに親しくなったのも自然なことでした。朝吹は、ボーヴォワール(とサルトル)が後押ししてくれたからこそ、最初の自伝的小説『愛のむこう側』(1983 年)を書き始めることができた、とも述べています。この小説に続く作品は、脚色を控えた回想録のシリーズです。その他にも、旅行記や、文化批評も執筆しています。これらの執筆活動により、彼女は、日本におけるフランス文化の権威そしてトレンドリーダーの地位を確立させました。

ボーヴォワール批判

上村や倉橋、朝吹らの著述家たちが、ボーヴォワールが説く伝統的家族制度からの女性の解放の議論の真価を認めた一方で、相当数の人びとは、既存の女らしさ規範を完全に否認することに困難を感じていました。結婚は拘束だと感じてはいても、多くの女性にとって、母性は女性アイデンティティの中心にありました。そして、結婚せずに子どもを持つという考えは、社会的に容認されていませんでした。また、多くの女性にとって受け入れがたかったのは、ボーヴォワールの意見は「男性本位」な価値観によると感じられた点でした。つまり、ボーヴォワールは「男性のような」姿勢や生き方を好み、女らしくあることを中傷していると思ったのでした。1960 年代後半になると、日本の「ウーマンリブ」運動は、女性が子どもを持ちたいと思える社会を求める方向性になってきていました。これに合致する形で、日本のフェミニズムにとってのボーヴォワールの価値については、懐疑的になってきていました。

高井邦子の 1969 年の論文は、ボーヴォワールに背を向ける議論の典型的な例です¹²。『第二の性』についての論評で、高井はボーヴォワールの思想の特徴を次のように分析しています。

[ボーヴォワールにとって]肉体的条件は動かしえない宿命ではなく、単に一つの状況であり、人間は自由に選択しながら自己を作り上げてゆく存在なのである。実存的存在論によると、何ものも人間を凌駕することは、不可能なのである。自然さえも人間の脚下にある¹³。

このような解釈から導き出されるのは、母性や他の女性性の経験を拒絶したところで生物学的な限界を超越することはできないのだから、自由な選択があるという考え方は「自己欺瞞」だということです。高井はまた、ボーヴォワールは「生命を維持すること(出産)は価値があるどころか、それは屈辱であり、人間を動物性に服従させることなのである」といっていると述べています。これを根拠に、ボーヴォワールは母性を「拒絶」し、母親になることは内在や他者として閉じ込められることだと論じていると、結論付けています¹⁴。残念なことに、このような、ボーヴォワールを「男性本位的」とする見方は、それが誤った解釈であると示す研究結果が日本のフェミニスト研究者により数多く発表されていたにもかかわらず、1990 年代半ばまで続

¹¹ ボーヴォワールの家の財産の減衰は、数世代の男性親族による資産管理の失敗の結果である。朝吹の家の財産は戦中までは保持されていたが、占領期の固定資産税制度の厳格化と個人資産の凍結により、生活のために財産を少しずつ切り売りしなければならなくなった。

¹² 高井邦子「ボーヴォワールにおける他者性の問題」『明治学院論叢』146 号(1969 年 2 月)127～156 頁。

¹³ 同書 133 頁。

¹⁴ 同書 134 頁。

いていました¹⁵。

ロスト(&ファウンド)・イン・トランスレーション

1986年のボーヴォワールの死は、世界的に、彼女のフェミニズムへの貢献についての再評価を促しました。日本では、その結果として、『第二の性』の最初の翻訳の問題の数々が明らかにされました。1953年に刊行された訳書の翻訳者は、フランス文学者の生島遼一でした。生島が章の構成を入れ替えてボーヴォワールの論理の展開を不明瞭にしまったことは、1980年代までには研究者間で知るところとなっていました。また、重要な用語の訳出の問題が、ボーヴォワールは女性を敵視しているという誤解の原因になっていることも指摘されていました。例えば、女性の身体構造や生物学的プロセスにあてた言葉に、はっきりと否定的な含みがあったのです。

誤訳の結果が、場所によっては、女性ステレオタイプを批判するというボーヴォワールの意図とは逆に、ステレオタイプを強化する文章になってしまっていたのです。例えば、ボーヴォワールは、家事という仕事は「女性が持つ女らしさの一部だと認識されている」、つまり、社会的にそれは女性がすべき事とされているのは、家事は「女性の仕事」だとする文化的仮定があるからだと説明しています。しかし、生島はこの箇所を、「女性であることからくる責任」と訳すことで、この種の仕事は、女らしさに関係する文化規範ではなく、生物学的に女性であることに関連があるのだと示唆しているのです。

女性研究者により結成された研究会が、1997年に『第二の性』の日本語訳「決定版」を完成させました¹⁶。この訳本は、原書の章構成を守り、女性の身体の生物学的プロセスについては、よりニュートラルな専門用語を用いています。また、哲学用語については、より明確で一貫性のある訳語を使用し、ボーヴォワールによる女性性や母性についての主張を明快にしました¹⁷。このボーヴォワールの再翻訳プロジェクトの動機となったのは、1980年代に女性学が学問分野として確立したことや、1990年代にクイア理論が紹介されたことなど、日本のフェミニスト理論の言説の変化でした。この「決定版」の刊行により、新しい世代の日本のフェミニストたちは、ボーヴォワールの思想を再発見しました。21世紀を生きる読者たちも、ボーヴォワールの洞察と自分たちとの関連性を見出したのです。

日本の読者のために『第二の性』を再生させる努力は実を結んだようです。より最近のボーヴォワール研究には「決定版」の影響と、翻訳者たちによる同書を広めようという努力の成果が反映されています。1989年執筆の『ポストモダン・フェミニズム』でボーヴォワールの哲学の「男性主体的」な部分について非難した金井淑子は¹⁸、後日その主張を撤回し、2002年の編著書では、『第二の性』を50冊の「フェミニズムの名著」の1冊に選んでいます¹⁹。

¹⁵ 例として、小説家三枝和子による雑誌連載「いかにして女性の哲学は可能か」第4講～第6講(『ユリイカ』1995年8月号～10月号に連載[『女の哲学ことはじめ』(青土社、1996年)所収])および、ボーヴォワールは、妊娠、出産、育児と結婚は女性を男性の「他者」とならしめた特質であると「否定」として解説しているフェミニズムの教本、島田燐子著『日本のフェミニズム：源流としての晶子、らいてう、菊栄、かの子』(北樹出版、1996年)参照。

¹⁶ ボーヴォワールの原書を読み直す目的で結成された研究会の名称は『『第二の性』を原文で読み直す会』。第1巻の翻訳に参加したのはメンバーの内10名で、第2巻は11名。最終的に、本文記載の通り、『決定版 第二の性』が出版された。

¹⁷ 井上たか子、木村信子「訳者あとがき」『決定版 第二の性(1) 事実と神話』(新潮社、1997)374頁。加藤康子、中嶋公子「訳者あとがき」『決定版 第二の性(2) 体験』(新潮社、1997)647頁。

¹⁸ 金井淑子『ポストモダン・フェミニズム』(勁草書房、1989年)

¹⁹ 金井淑子「S・de・ボーヴォワール 『第二の性』」、江原由美子・金井淑子編『フェミニズムの名著50』(平凡社、2002年)、60～69頁。

同様に、佐藤浩子は、2005 年に大学紀要で発表した論文で、ボーヴォワールの母性に対する考え方に触れ、母親としての役割と家の外での仕事とのバランスを取ることの難しさを理解していたと述べています²⁰。

ボーヴォワールは母親にならなかった。しかし、母親が置かれている状況とその困難さを理解し、それを切り抜ける方法を考えた人である。ボーヴォワールは、母にならなくても『女は女である』といい切った。この時点から、母になることは女にとって宿命ではなくなり、多様な生き方を人生のさまざまな段階で選ぶことが始まったのである²¹。

佐藤の論文の参考文献のリストには、『第二の性』を原文で読み直す会』のメンバーの筆による、現代のフェミニズムにおけるボーヴォワールの重要性を再評価する論文が、目立って多く含まれています。ここに、日本の読者にボーヴォワールの議論を記憶してもらおうという、「決定版」翻訳者たちによる努力の成果が表れています。

そう思う一方で、新たな大きな疑問がわきました。日本のフェミニズムによるボーヴォワールの思想の「再評価」を目指した活動家的情熱は、結果として、ボーヴォワールが想像も意図もしなかった独特の解釈を生み出してしまったのではないかと。というものです。

例えば、1997 年の訳書のあとがきで、井上たか子と木村信子は、生島の翻訳はところどころで、ボーヴォワールは女性というカテゴリーをひとまとめにして批判しているような、誤った印象を作り出していると指摘しています。この原因は、ボーヴォワールが、「現実の女性」を示す箇所と「永遠の女性的なもの」というようなステレオタイプを示す箇所の両方に、「女性性」という単語を使用していた点を、生島が訳し分けていなかったことにあります。「決定版」では、この二つを識別するため、女性ステレオタイプには「女らしさ」を、現実の女性には「女であること」をあてています。

しかし、翻訳者たち自身も指摘する通り、ボーヴォワールの原著自体も、その二つの概念を区別しきれてはいませんでした²²。2000 年を迎える頃には、生物学的な性別(セックス)と文化的に構築された性別(ジェンダー)という言葉の区別は一般的になりましたが、ボーヴォワールが彼女のフェミニストとしての論説の基礎となるものを書き上げた当時は、その違いはほとんど理解されておらず、用語の使い分けもされていませんでした。さらに、『第二の性』第 1 巻の序文などの記述からは、ボーヴォワールは、「ステレオタイプ」と「女であることの現実」の社会的融合を要点にしたいと考えているように見受けられます。実際、彼女は、女性性についての長い論考を書き始めるにあたり、あたかも、「女」というカテゴリーの不安定性そのものを指摘するかのように、真剣に、「女とは何か？」という疑問を投げかけています。ということは、翻訳者たちによる「女性性」という言葉の二つの意味を区別しようという試みは、おそらく良かれと思ってした反面で、場合によっては、ボーヴォワールの問いかけの意図するところに、逆らってしまっているのかもしれない。

さらに、翻訳者たちがその区別を翻訳上で示したことで、セックスとジェンダーの概念的な区分をボーヴォワールがどの程度しようとしていたかを、明確にするのではなく、むしろわかりにくくしてしまった可能

²⁰ 佐藤浩子「ボーヴォワール:『第二の性』と＜母性＞」『川村学園女子大学女性学年報』3 号、2005 年、43～50 頁。

²¹ 同書 44 頁。

²² 井上たか子、木村信子「訳者あとがき『決定版 第二の性(1) 事実と神話』(新潮社、1997) 372 頁

性もあります。『第二の性』が、後に異なる単語を使って区別されるようになる二つの概念の、理論的な土台をつくることに貢献したことは間違いありません。翻訳者たちは、この功績を強調して、「(ボーヴォワールが論じる) 社会・文化的につくられた性は、生物学的な性(セックス)と区別して、現在はジェンダーという用語であらわされている。」と述べています²³。このコメントは、翻訳者たちが、生物学的性別と文化的に構築された性別の両方の意を含む、日本語の「性」という言葉を、生物学的な性別(セックス)を示していると理解した箇所に使用する傾向があることを裏付けています。

とはいえ、先に述べたように、この「明確化」は、ボーヴォワールが意図的に、「性」という言葉の有益な両義性(生物学的事実と文化的構築の両方を示す)を残した箇所を、わざわざ訳し分けしてしまった可能性もあります²⁴。このことはまた、セックスとジェンダーに関連する用語の訳出が一筋縄ではいかないものであるという、日本語の特徴を示してもいます。翻訳者たちが使用する、生物学的な性別を示す言葉としての「セックス」は、日本語では「ジェンダー」との組み合わせでのみ、その意で使用されます。「セックス」と「ジェンダー」のいずれも、最近使用されるようになった外来語です。ボーヴォワールが使用したフランス語からというよりは、英語からの借用です。フランス語か英語かを問うのは時代錯誤なばかりでなく、英語をフランス語(数ある言語のなかでも)より上位にあると決めてかかる、残念かつ全く意図せぬ結果を招きます。これは、第二次大戦後の占領軍政治の遺産が、日本における言語の政治を左右した歴史に起因することであり、フェミニズム一般や、ボーヴォワールによるフェミニスト理論への貢献とは別の話です。

結論

生島遼一による『第二の性』の最初の翻訳は、何はともあれ、50年代から60年代初期に、女らしさというものは生まれながらのものではなく文化的に構築されたものだと言うことで、多くの若い女性たちに刺激を与えました。翻訳上の重大な問題が、ボーヴォワールの議論を部分的に不明瞭にしていたにもかかわらずのことです。しかしまた、その誤訳は、多くの読者に、ボーヴォワールは女性性や母性を侮辱しているという、誤った印象を与えてしまいました。1960年代の終盤になると、「男性本位的」とみなされたボーヴォワールの思想は、「ウーマンリブ」運動初期の運動家たちに時代遅れだと見限られるようになりました。1986年のボーヴォワールの死を受けて世界的に巻き起こった、彼女のフェミニスト理論への貢献の再評価が、日本の研究者によるボーヴォワールの思想の再検討を促しました。1997年の『第二の性』再翻訳のおかげもあり、現在の日本では、ボーヴォワールは現代のフェミニスト理論の礎となる概念の多くを築いた先駆者であると理解されています。しかし、1997年の再翻訳が、多くの点で生島版からの改善を成し遂げた一方で、翻訳者たちの活動家の情熱がボーヴォワールの思想の「明確化」にむけられたことが、意図せぬ結果をもたらしてもいます。それは、ボーヴォワールが曖昧なまましておくことを選んだ箇所をわざわざ訳し分けたため、原著テキストの哲学的複雑性が部分的に平板化されてしまったことです。とはいえ、ボーヴォワールの名前が、日本のフェミニズムについての重要な参考文献や歴史の中に登場しているということは、ボーヴォワールのフェミニスト理論の創始者としての地位は安泰であるということでしょう。

²³ 同書 371 頁。

²⁴ フランス語の原著では *sexe* と *féminité* の語が使用されているが、その用法はあいまいであり、生物学的な性別と文化的構築であるジェンダーのどちらを意味しているのかははっきりしない箇所は少なくない。これは、ボーヴォワール研究者たちが盛んに議論している点である。皮肉なことだが、もしも、『決定版』の翻訳者たちが日本語の「性」という言葉の多義性を利用してあいまいさを残していたら、原著の意図に近いものになっていたとも考えられる。翻訳者たちは、現代のフェミニスト研究者の常識に基づいて、訳語を区別してしまったが、ボーヴォワールが原著を執筆した当時には、その区別は存在していなかったのである。